史跡毛原廃寺跡

西方地区発掘調査概要報告

令和４年（2022）３月

奈良県山添村教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所

序　　文

毛原廃寺跡は、山添村大字毛原地内にある奈良時代前期に創建された寺院跡です。大正15年に国の史跡として指定され、これまで行政や地域によって調査・研究や保護に向けた取組が行われてきました。

本調査は、毛原廃寺の西方地区にある建物跡の規模を明らかにするために実施しました。調査の結果、礎石や壁地覆根石列、大量の瓦、建築部材と考えられる木材などが発見され、建物規模が東西五間・南北四間であると確定することができました。今後、出土した遺物の詳細な分析をすすめ、さらなる調査・研究を進めていきます。

最後になりましたが、現地での調査や報告書の作成まで多大なるご協力をいただきました奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、山添村毛原区および関係機関、関係者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

令和４年３月31日

奈良県山添村教育委員会
教育長　西久保　良隆

例　　言

1．本書は奈良県山辺郡山添村大字毛原に所在する、史跡毛原廃寺跡の発掘調査概要報告である。

2．本発掘調査は令和３年（2021）に山添村が奈良県立橿原考古学研究所の協力を得て実施した遺跡範囲の確認調査である。

3．調査期間と調査範囲は以下のとおりである。

期間：令和３年（2021）５月14日～７月14日

範囲：93.2㎡

4．概報の作成・編集は令和３年（2021）５月～令和４年（2022）３月に実施し、奈良県山添村教育委員会事務局の向井一俊（主事）と奈良県立橿原考古学研究所の岡田雅彦（主任研究員）が担当した。調査および概報作成体制は、以下のとおりである。

奈良県山添村教育委員会

教育長	西久保　良　隆	
事務局長	上　脇　　力	
事務局長補佐	大　西　重　彦	椋　本　泰　明
主事	向　井　一　俊（調整・事務処理担当）	

奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課

課長	石　原　昌　伸	
課長補佐	光　石　鳴　巳	
調整員	廣　岡　孝　信	
主査	中　野　　咲	宇　野　隆　志

奈良県立橿原考古学研究所

所長	青　柳　正　規	
副所長	矢　冨　直　樹	岡　林　孝　作
調査部長	川　上　洋　一	
調査課長	鈴　木　裕　明	
調査第一係長	大　西　貴　夫	
主任研究員	岡　田　雅　彦（発掘調査担当・概要報告作成）	

5．現地の発掘調査および本概報の作成のために、以下の協力があったので記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

（機関等）

毛原区、文化庁、関西電力送配電株式会社

（個　人）

奥田道子、奥田幸枝、奥田　歩、神崎智子、中森晃一、福井新成、福井一裕、福山茂光、山中政明

6．調査に関わる出土遺物や遺構図面、写真資料などの調査記録は奈良県立橿原考古学研究所に保管している。

7．奈良県遺跡地図における遺跡番号は、毛原廃寺（跡）〔102－0012〕である。
奈良県立橿原考古学研究所の調査番号は021016である。

本　文　目　次

序文
例言
１．はじめに・・1
２．遺構・・4
３．遺物・・8
４．おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

挿　図　目　次

図１．・・・1
図２．・・・2
図３．・・・3
図４．・・・5
図５．・・・7

１．はじめに（図１・２）

毛原廃寺は、山辺郡山添村毛原に位置する古代寺院である。本調査は、山添村が文化庁の埋蔵文化財緊急調査費国庫補助金を活用しておこなった毛原廃寺の範囲確認調査である。今回発掘調査をおこなった西方地区は、発掘調査時は「国史跡毛原廃寺跡」の指定範囲外であったが、令和３年（2021）10月11日付けの官報告示で国史跡に追加指定された。

毛原廃寺は、南北を山と川に挟まれた谷地形に立地する。谷地形に立地するが、比較的開けた平坦な地形に位置する。毛原廃寺の南を流れる笠間川は北東で名張川に合流して北進し、そして木津川に合流する。この笠間川と名張川の合流地点に毛原廃寺に瓦を供給した岩屋瓦窯がある。

毛原廃寺は、出土した瓦から奈良時代前半に建立された寺院と考えられるが、毛原廃寺に関する史料は残されておらず、当時どのように呼ばれていたか明らかになっていないため、字名を用いて毛原廃寺と呼ばれている。

毛原廃寺には、現在も南門・中門・金堂の礎石が残されている。当時の都である平城京から東へ遠く離れた山中に存在するにも関わらず、現地に残されている礎石は平城京内の著名な大寺院と同レベルの加工技術が用いられていること、大寺院と同規模の建物が存在することなどから、大正15年（1926）に国指定史跡となっている。

今回発掘調査をおこなった西方地区は、金堂などの寺院の中心部から深い谷を挟んで北西に位置している。大正７年（1918）の毛原廃寺についての調査報告には、この地区に礎石の存在が指

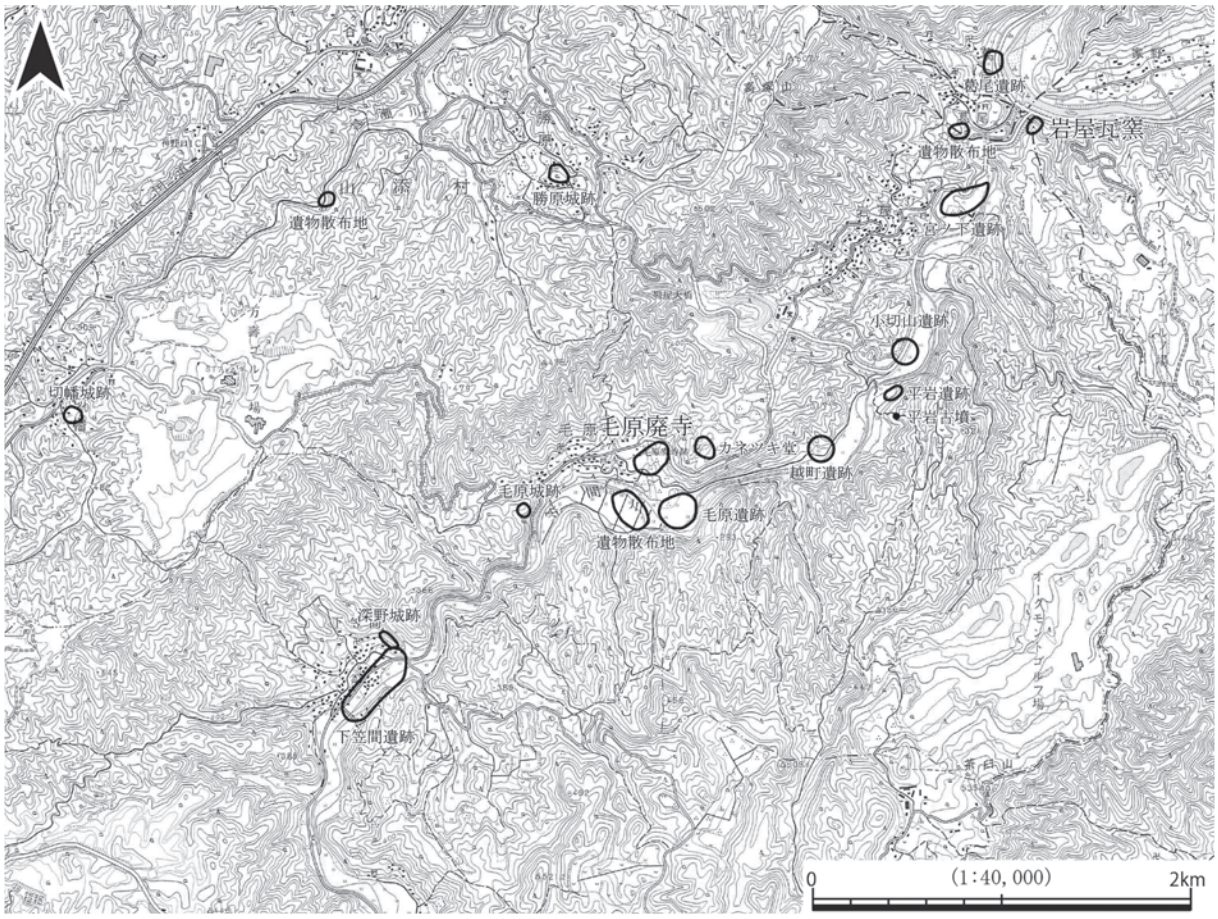

図１　毛原廃寺位置図（S=1/40,000）国土地理院発行1/25,000地形図「名張」を加工して作成

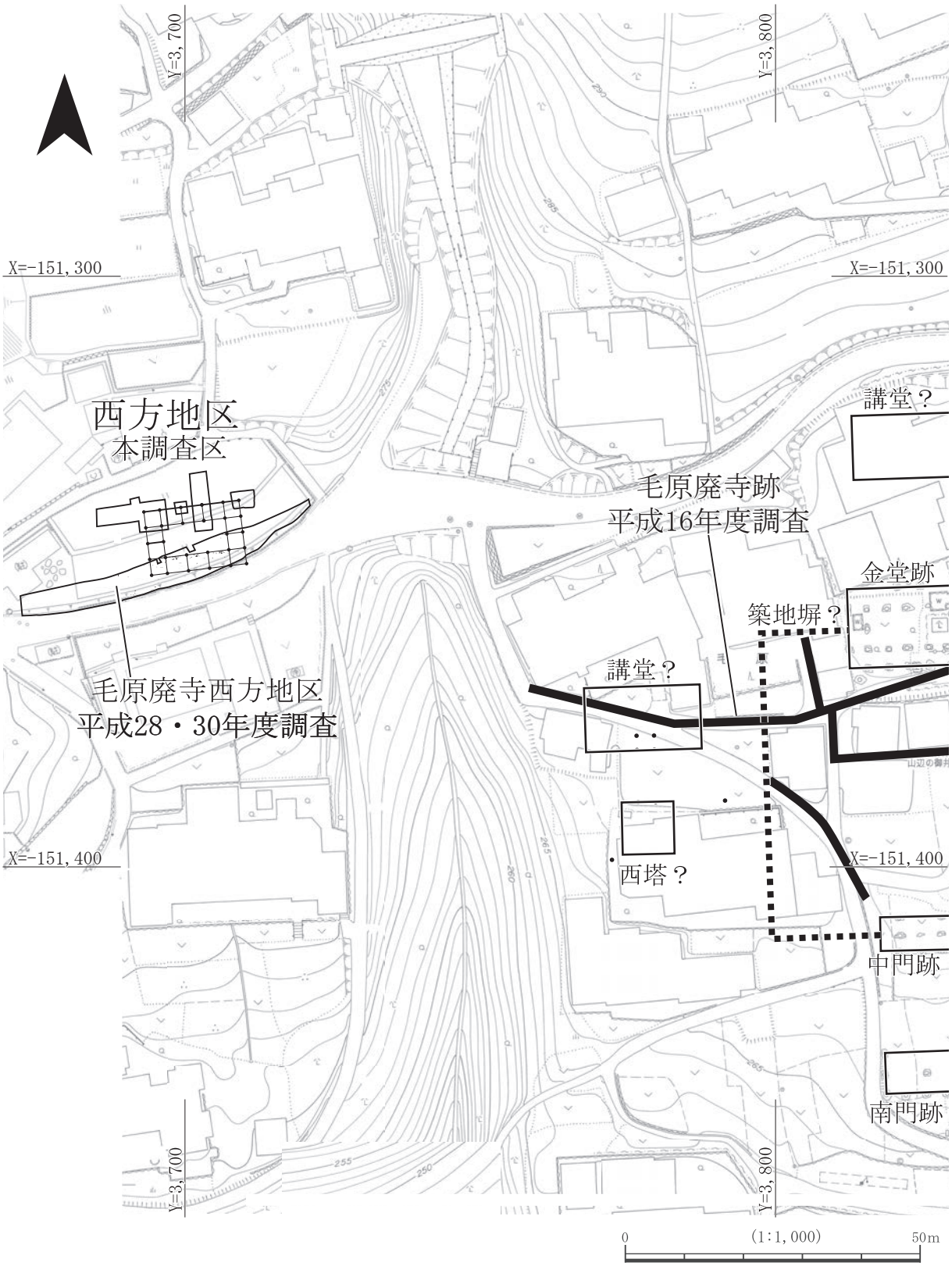

図２　調査位置図（S=1,000）　奈良県立橿原考古学研究所2020図11に山添村2020図９を重ねて作成

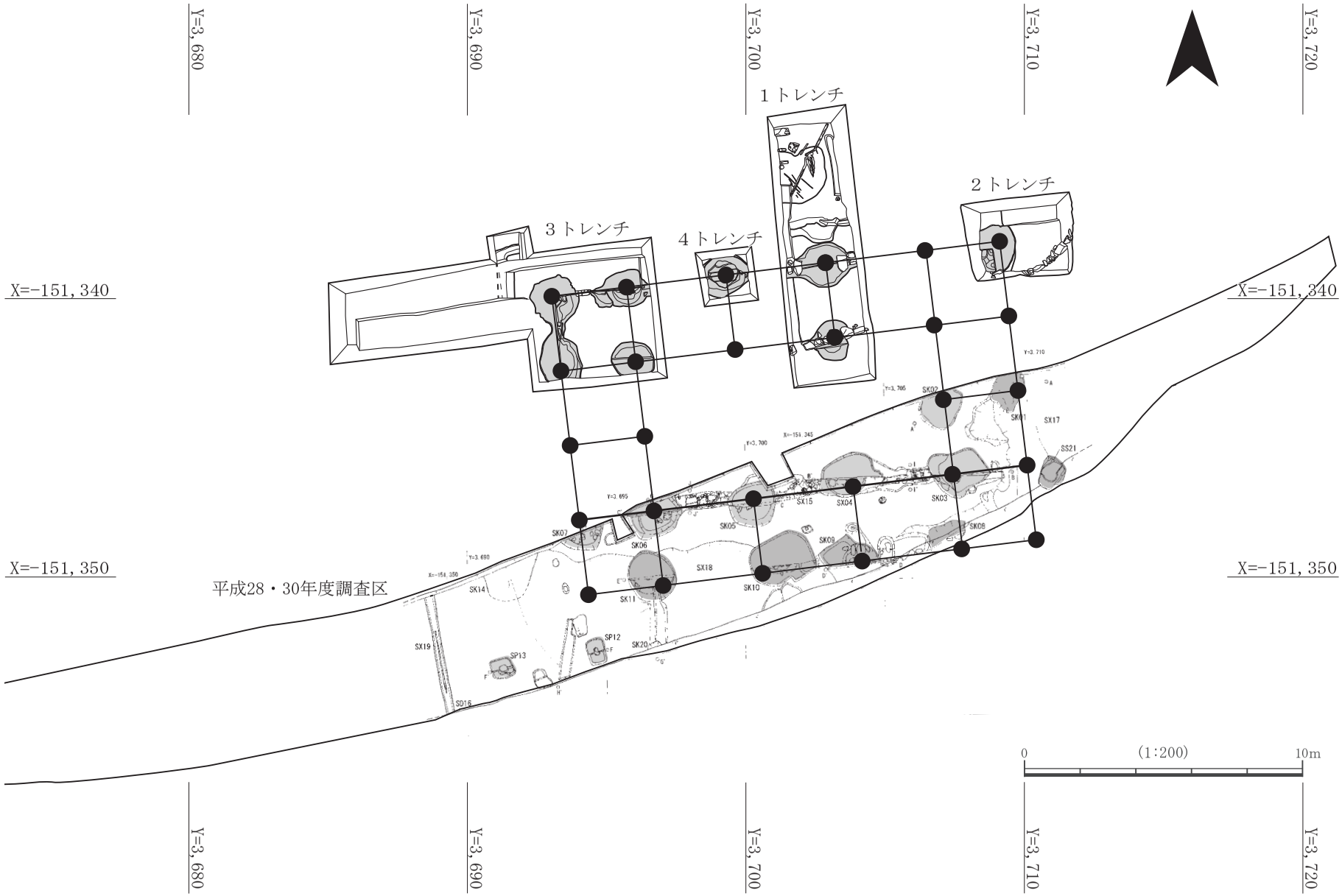

図３　トレンチ配置図（S=1/200）平成28・30年度調査区は奈良県立橿原考古学研究所 2020 図 12 を転載

摘されているが、大正15年の史跡指定の際には含まれなかった（西崎1918）。

昭和13年（1938）に黒田昇義氏によって調査がおこなわれ、西方地区に礎石建物が存在することが知られるようになった。黒田氏の報告によると、その当時礎石は二か所で確認できたが、一か所は動いており、もう一か所は原位置を保っていたとされている。この調査成果から黒田氏は、東西五間・南北四間の建物を復元したが、緊急性の高い調査であったため、建物規模や位置などを厳密に特定することはできていなかった（黒田1955）。

その後、西方地区南を東西に通る県道の拡幅に伴う発掘調査が平成28・30年（2016・2018）度におこなわれ、礎石抜き取り穴が検出された。これにより、黒田氏が調査した建物位置を特定することができた。しかし、建物の東・南・西側が12世紀以降に削平を受けていたことで、当初の基壇の状況と東西規模について確定させることができず、課題となっていた（奈良県立橿原考古学研究所2020）。

このような経緯をふまえて、今回の調査は、西方地区で検出された建物の規模・基壇外装などを明らかにすることを目的とした。

調査期間は令和３年（2021）５月14日～７月14日、調査面積は93.2㎡である。

２．遺構（図３・４）

既往の調査成果から復元された礎石位置に４つの調査区（１～４トレンチ）を設定した。層序は現代耕作土である表土、中世包含層、地山となる。

基壇　基壇の東端は、南側の調査と同様に12世紀以降に削平（SX101）を受けていたが、１トレンチと３トレンチでは基壇の北端と西端を確認することができた。これにより基壇は東西約18.6m、南北13.2m（現存基壇規模は東西18.0m、南北11.5m）と推定される。

検出した残存基壇高は、北端で30㎝、西端で20㎝と低い。既往の調査で検出した南端の残存基壇高は90㎝あることから、基壇前方から後方へかけて基壇高が低くなる法隆寺大講堂などに似た構造であったと考えられる。

既往の調査では掘込地業は確認されていないが、地山直上で下半が20～30㎝の厚さで３～４層、上半が５～10㎝の単位で６～８層の版築が確認されている。しかし、今回の調査では、１トレンチや３トレンチで地山の上で３㎝程の積土が確認できたが、既往の調査のように厚い版築は確認できなかった。後述する壁地覆根石列（SX102）が検出されていることから、当時の基壇上面が大きく削平されているとは考えにくく、後方の基壇土大半は地山削り出しであったと考えられる。

基壇外装　基壇外装は後世に抜き取られたと考えられ、残されていなかった。但し、３トレンチで基壇外装抜き取り痕跡の可能性がある幅0.6m、深さ２㎝程の溝状遺構（SX103）を検出している（PL. ３－２）。なお、遺構の底面が平らでないことから、乱石積であった可能性もある。

礎石抜き取り穴　基壇上では、既往の調査から想定していた通りの位置で礎石抜き取り穴８基

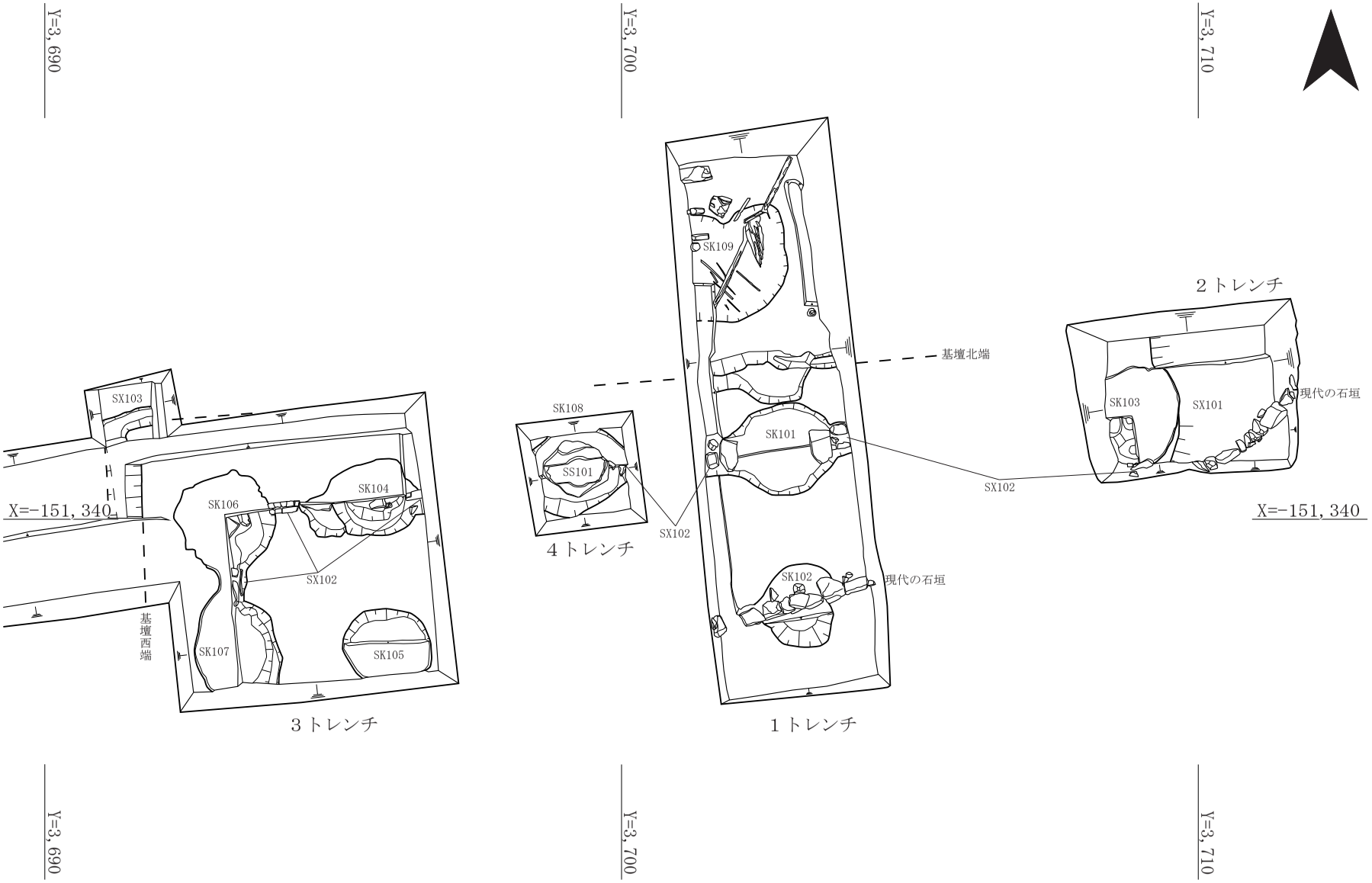

図４　平面図（S=1/100）

0　(1:100)　5 m

（SK101 ～ 108）を検出した。礎石抜き取り穴は表土直下から切り込んでおり、２トレンチではSX101を切っていた。SK101・104・106では礎石を据えるための根石と考えられるものが、SK103では根石の抜き取りと考えられる痕跡が確認できた。SK101・104・106・107では後述する壁地覆根石列（SX102）まで掘削されているが、基本的には礎石の抜き取りに影響が及ばない部分については根石抜き取られず存置されていた。

礎石　４トレンチのSK108は抜き取り穴として掘削されていたが礎石（SS101）は残されていた。検出した礎石の規模は、横117㎝、縦104㎝、厚さ32㎝、柱座及び地覆座高は4.0 ～ 4.5㎝である。

この礎石は、黒田氏が原位置を保っていたと報告している礎石である（黒田1955）。しかし、礎石柱座上面と検出した基壇上面がほぼ同じ高さであることから、後世に下へ落とし込まれたものと考えられる（PL. ４－５）。ただし、下に落とし込まれてはいるが、その平面的な位置はほとんど動いていないと判断できる。どの段階で落とし込まれたかは礎石抜き取り穴と落とし込みのための穴が重複しているため不明である。

既往の調査と今回の調査から建物規模は、東西５間（約16.2m）、南北４間（約10.8m）の四面庇付建物（三間四面）であることが確定した。

壁地覆根石列　礎石抜き取り穴SK101・103・104・106・107・108の周囲には、壁地覆根石列（SX102）が残されていた。検出した壁地覆根石列は、SK101・103・104・106・108の間では東西方向、SK106とSK107の間とSK103の南側では南北方向である。

壁地覆根石列は、礎石と礎石をつなぐように基壇上に幅60㎝程の溝を掘り、上面が平らな石を据え付け、その上に細長く割り凸面を上にした瓦を３枚ほど重ねていた。この瓦の上面に地覆を設置したと考えられる。基本的に地覆が基壇上面にあることを考慮すると、基壇面が大きく削平されていないことがわかる。

基壇外側　基壇外側では、雨落溝などの遺構を確認することができなかった。但し、１トレンチ基壇北端より北側では、廃絶した際に廃棄された瓦が大量に出土した（PL. ２－２）。軒瓦が基壇際に集中して出土することから、これらの大量の瓦は屋根からずり落ちたものであることがわかる。瓦と一緒に木材も出土しており、その一部にはほぞが加工されていることから、この建物に使用された建築部材となる可能性がある。また、柱材の可能性がある木材も出土した。検出位置が礎石想定位置の真北にあるため、建物に関連する柱の可能性を考え断ち割ったが、下部は10㎝程しか埋まっておらず、その位置で柱として立っていたとは考えにくい。これらの木材については取り上げており、今後分析を進める予定である。

その他の遺構　その他の遺構として、１トレンチ基壇北側では、横2.0m以上、縦1.8m、深さ0.7mの土坑（SK109）を確認した。SK109は、層位から西方地区の礎石建物建立以前に掘削され、礎石建物が機能していた際には埋まっていたと考えられる。

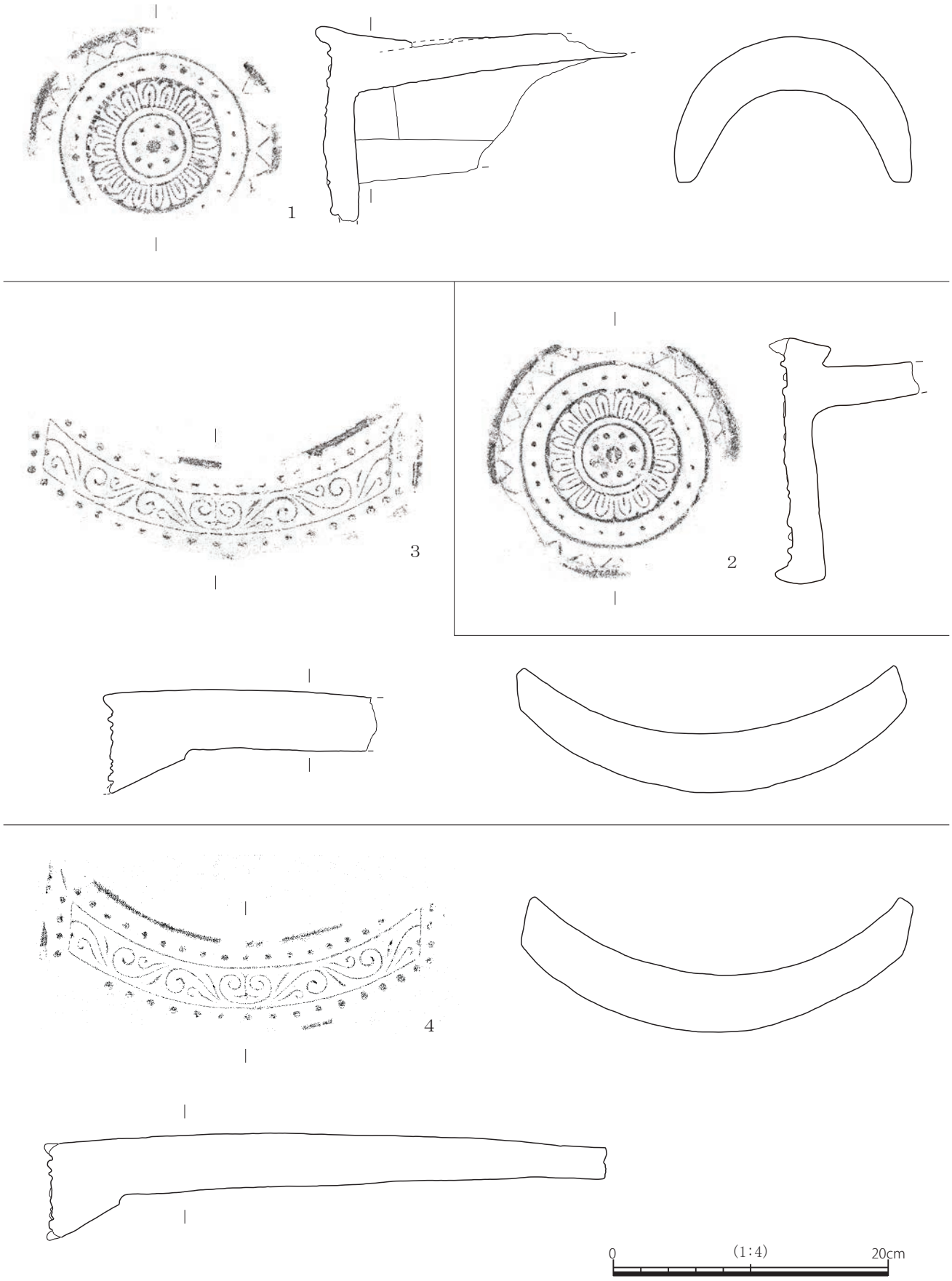

図５　軒瓦（Ｓ＝1/4）

３．遺物（図５）

コンテナ123箱分の瓦とコンテナ５箱の木製品が出土したが、土器はほとんど出土しなかった。遺物については現在整理作業中だが、ここでは残りの良い軒丸瓦と軒平瓦のそれぞれ１型式を報告する。型式・笵傷段階等については奈良県立橿原考古学研究所2020を使用する。

軒丸瓦 KHM１型式（図５－１・２）１・２は笵傷２段階かそれ以降の可能性がある註(1)。１は瓦当部から丸瓦部凸面にかけてタテケズリ後、瓦当部周縁にヨコナデが施される。瓦当裏面はケズリ後ナデ、瓦当部と丸瓦部との境に強いヨコナデが施される。丸瓦部凹面は未調整で布目痕跡が残る。凹面両側縁近くに広いタテケズリが施される。向かって左側の側面には分割截線と分割破面が残る。分割截線は丸瓦広端部まで及ばない。２は瓦当部から丸瓦部凸面にかけてタテナデが施される。瓦当裏面下縁に面取り、瓦当裏面から丸瓦接合部付近までヨコナデが施される。丸瓦部は未調整で布目痕跡が残る。

軒平瓦 KHH１A 型式（図５－３・４）３・４は、笵傷２段階かそれ以降の可能性がある註(2)。平瓦部に分割界線が残ることから桶巻作りで、顎部は段顎 IS である。３は凹面にタテケズリ後ヨコナデが施される。凸面は顎部をヨコケズリ後ヨコナデ、顎部と平瓦部接合部に強いヨコナデ、平瓦部はタテ縄叩き後タテケズリが施される。側面凹面側に面取りが施される。４は凹面瓦当側１/３までヨコケズリ、次の１/３までヨコナデが施され、残りの１/３は未調整で布目痕跡が残る。凸面は顎部ヨコケズリ後ナデ、顎部から平瓦部にかけてタテケズリ後ヨコナデ、平瓦部はタテナデが施される。側面は瓦当側から１/３まで凹面側に面取りが、残り２/３は焼成後に打ち欠きが施されており面取りについては不明である。

４．おわりに

壁地覆根石列が残されていたこと、基壇の北端と西端を確認できたこと、基壇端で軒瓦が集中して出土したことなどから、建物は東西５間（約16.2m）、南北４間（約10.8m）の四面庇付建物（三間四面）であることが確定した。また、既往の調査で指摘されているが、正面一間分は唐招提寺金堂のように壁がない吹放しと呼ばれる形態であり、その後ろの空間を壁や扉で囲み、堂内としていたものと考えられる。

また、壁地覆根石列の残りがよいため、創建当時の基壇上面が残っている考えられる。今まで発掘されてきた他の古代寺院の建物基壇で今回のように基壇上面が残っていた事例は極めて少なく、貴重な事例といえる。

以上のように今回の調査によって、西方地区の礎石建物規模と構造が明らかになったことは、史料に残らない謎の大寺院である毛原廃寺の性格などについて考えていくうえで、極めて重要な成果と言える。

（岡田雅彦）

註

⑴奈良県立橿原考古学研究所2020においてKHM１型式とKHM１Ａ型式は、笵傷２段階まで分類されている。今回報告したKHM１は笵傷２段階④右上の鋸歯文先端に笵傷が、KHM１Ａは右脇区最下段の珠文に笵傷があり、笵傷２段階とされるものより笵傷が増えている可能性がある。ただし奈良県立橿原考古学研究所2020は完形資料が少ない中での報告であることから、これらが笵傷２段階であるのか、３段階とすべきかについては今後刊行予定の本報告で検討したい。

⑵2021年12月13日に橿原考古学研究所大西貴夫調査第一係長ともに名張市郷土資料館においてKHH１Ａと同笵の可能性がある夏見廃寺出土軒平瓦Ⅱｂの資料調査をおこなった。Ⅱｂは公表されているKHH１Ａで唯一曲線顎を呈している。本調査で出土した瓦と実物を用いて照合をおこなったが、KHH１Ａと同笵であることは間違いない。また、笵傷段階は今回報告したKHH１Ａと同様に右脇区最下段の珠文に笵傷が確認できることから２段階かそれ以降の可能性がある。名張市郷土資料館での同笵確認に際しては、名張市教育委員会　谷口文隆氏にご協力いただいた。

参考文献

西崎辰之助1918「毛原廃寺址」『奈良県史跡勝地調査会報告書』第五回　奈良県

黒田昇義1955「山辺郡豊原村大字毛原　史跡毛原廃寺跡　指定地区外の遺構」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第５輯　奈良県教育委員会

松田真一・近江俊秀1991「毛原廃寺の研究－基礎資料の集成と若干の考察－」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷』第15冊　奈良県立橿原考古学研究所

奈良県立橿原考古学研究所2020『毛原廃寺－県道上笠間八幡名張線道路改良に伴う発掘調査報告書』奈良県文化財調査報告書　第184集

山添村教育委員会・奈良大学2020『毛原廃寺跡　第２次発掘調査報告』山添村埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集

PL. 1

1　調査区全景（上が北）

2　1トレンチ全景（上が北）

3　SK101（南から）

4　SK102（南から）

1　1トレンチ基壇北端（北から）

2　基壇北側瓦堆積状況（北東から）

3　SK109（西から）

4　2トレンチ全景（上が北）

5　3トレンチ全景（上が北）

PL. 3

1　3トレンチ基壇西端（西から）

2　SX103 検出時（南から）

3　SK104・106、SX102（南から）

4　SK104（南から）

5　SX102（南から）（SK104 と 106 の間）

6　SX102（西から）（SK104 と 106 の間）

7　SK106・107（東から）

8　SK106（南から）

1　3トレンチ SK106（東から）

2　SX102（東から）（SK106 と 107 の間）

3　SK107（東から）

4　SK105（北から）

5　4トレンチ SS101 検出時（南から）

6　SS101 全景（南から）

7　やまぞえ小学校発掘体験（東から）

8　現地説明会（人の位置が礎石の位置）（南西から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきけはらはいじあと
書名	史跡毛原廃寺跡
副書名	西方地区発掘調査概要報告
巻次	－
シリーズ名	山添村埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第４集
編著者名	向井一俊・岡田雅彦
編集機関	奈良県山添村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
発行機関	奈良県山添村教育委員会
所在地	〒630－2344　奈良県山辺郡山添村大字大西151 TEL：0743－85－0049
発行年月日	令和４年（2022）３月31日

収録遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
史跡（しせき） 毛原廃寺跡（けはらはいじあと）	奈良県（ならけん） 山辺郡（やまべぐん） 山添村（やまぞえむら） 大字毛原（おおあざけはら）	293229	102- 0012	34° 38′ 08″	139° 52′ 25″	2021/５/14 ～ 2021/７/14	93.2㎡	遺跡範囲確認

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡 毛原廃寺跡	寺院跡	奈良時代	奈良時代の礎石建物	軒丸瓦・軒平瓦・木製品	西方建物跡の北端と西端の基壇および礎石１基を検出した。基壇の北側で大量の瓦を検出した。

要約	遺跡範囲の確認のために史跡毛原廃寺跡の西方地区の発掘調査をおこなった。今回の調査で西方地区礎石建物の東西規模が確定した。また、壁地覆根石列を検出できたことから、創建当時の基壇上面が削平されておらず遺存している可能性が高いことがわかった。

史跡毛原廃寺跡
西方地区発掘調査概要報告

編集・発行　奈良県山添村教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所
〒630-2344
奈良県山辺郡山添村大字大西151
TEL　0743-85-0049
FAX　0743-85-0219
発行年月日　令和４年（2022）３月31日
印　　刷　共同精版印刷株式会社